

月刊「神戸っ子」昭和38年9月10日印刷 通巻30号 昭和38年9月10日発行 毎月1回10日発行

郷土を愛する人々の雑誌

神戸っ子

1963/9

monthly magazine kobekk september 1963 no. 30



Hino

高性能の日野

兵庫日野ディーゼル株式会社

TEL ④ 1191



■ コンテッサ・ルノーのご用命は 神戸日野モーターへ TEL ④ 5771-5 ■

これは神戸を愛する人々の手帖です

あなたのくらしに楽しい夢をおくる

神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ

これは神戸っ子の心の手帖です



長田神社の鶏 加藤盛男 (神戸史談会)

神苑に、しばしば見かける雌雄の鶏の遊んでいる風景は、参拝者の心に平和と静けさを感じさせます。神功皇后が三韓征伐より凱旋された時、鶏聲の聞ゆる里に社を造れとの神託によりて、長田の里に奉斎せられたのが長田神社で、其の由来に基づき、境内に鶏の放し飼をして居ります。鶏の玩具が有る事は余り知られていない様です。土で造った小さな雌雄の可愛い、玩具です。九州の博多に注文して造らすとの事です。

カット・中西 勝 (二紀会)

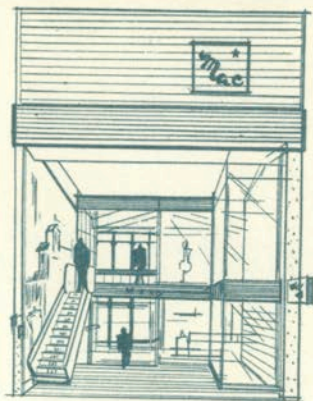
Fachrein's

ドイツ菓子

ピラミッド
ビスケット
各種ケーキ

ユーハイム

本店・三宮生田神社西隣
神戸そごう・神戸三越・国際名菓店



newly

OPEN

新装開店 9月20日

MAC

マック 三宮本店

SAS

のタラップのある店
売場も2倍になります
MACの夢も実現しました

?

- A. おしゃれな 男の 集るところ
- B. シャープな 男が さがせるところ
- C. 新しい流行を知るところ
- D. 服飾のすべてがそろったところ
- E. それが、MACというわさ
- F. そんな気持ちでつくりました

おしゃれ洋品の **おからずや**



マック

三宮本店

トアロード店

新開地店

姫路店

神戸セシター街
TEL ☎ 0895
センター街西口
TEL ☎ 0896
新開地本通り
TEL ☎ 7688
姫路駅デパート
TEL ☎ 1261

神戸と女性

麻鳥千穂 (宝塚歌劇団星組)

神戸市庁舎前大通り、フラワー・ロードの南端に、新名所として、七色の噴水が誕生。神戸っ子たちは大喜びです。宝塚のスター麻鳥千穂さんも、親和学園を卒業された、神戸っ子タカラ・ジエンヌ、星組の代表スター。「こんないい噴水ができて、また神戸を自慢するタネがふえたわ」と、歌と踊りの名手もご機嫌です。



Mikimoto Pearls



真珠は花嫁の宝石です。ミキモトの粒よりのパールは、世界中の花嫁のあこがれになっています。ミキモトパールは、いつまでもかわらぬ輝きをもつ、やさしい愛のシンボルです。



御木本真珠店

神戸店 - 三宮・神戸国際会館

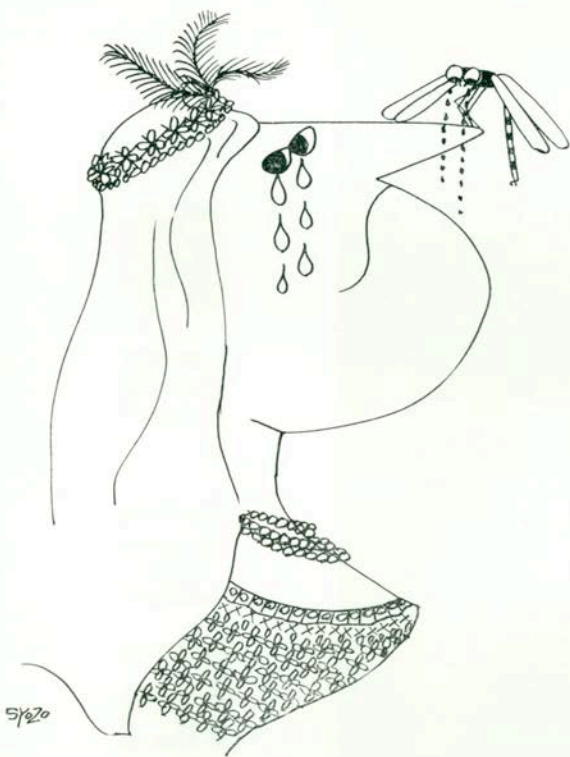
Tel. 22 - 0062

大阪店 - 堂島・新大ビル

Tel. 361 - 0220

本店 - 東京・銀座四丁目





9 月 目 次

- 1 長田神社の鶏／加藤盛夫・え中西勝
- 3 神戸と女性／麻鳥千穂（宝塚歌劇団星組）
- 7 連載随想第13回／バカ＜ンス＞の旅・白川渥
- 11 れんさい随想⑩／神戸のこと手当り次第
淀川長治
- 14 連載随想第2回／うぐいす・阪本勝
- 19 連載第7回／神戸とエトランゼ
故郷は三つ・陳眞臣
- 25 野のはな対談・すてきなお嬢さんこんにちわ！
きく人・岡部伊都子／話す人・西村久恵
- 29 神戸遊戯誌1／ゴルフ①・青木重雄
- 30 わんぱく江戸日記／デイト・伊達俊太郎
- 32 □神戸百店会特集1□
ぼくの神戸をムチャにせんといってくれ
花森安治
- 35 今秋のモード／福富芳美
- 39 暮しのアクセサリ⑥／矢野有尙
- 41 □神戸百店会特集2□座談会／花開く神戸
- 48 ピンクコーナー（T）
- 50 Autumn Bride／神戸っ子の花嫁さん
- 54 神戸うまいもん巡礼 No.13／赤尾兜子
- 56 紳士入門⑦／おしゃれ紳士・竹田洋太郎
- 58 ポケット・ジャーナル
- 60 KOBEEKO SHOPPING GUIDE
- 64 連載第5回／神戸夫人・武田繁太郎
- 67 神戸の催物ごあんない
- 68 神戸百店会だより・後記
- 表紙・小磯良平／カメラ・米田昌弘・米田定蔵
デザイン・橋昭三

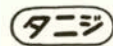
コウベでみがく
世界の宝石

直輸入

神戸宝后

トアロード

大丸上ル 300メートル



③ 2397

バカ(ンス)の旅

白 川 渥

え・中 西 勝

——漸く、朝夕は少し涼しくなりましたが、ことしの夏も軽井沢に行かれましたか——

「ええ、一週間ほど軽井沢から、東京を廻って帰って来ましたが、この暑中、ゴルフ、バックをかついでネ。全く、バカンスならぬバカの旅だ。夏の旅行なんて、学生のやることですよ。家でシャワーを浴びて寝転がっているのが、最高の鎖夏法なんだが、何の因果かゴルフに取りつかれて、去年も今年もいそいそと出かけて行きました。ハハハ……我ながら若返ったもんだ」

——で、軽井沢のお宿は、今年も御親戚の石坂洋次郎さんの別荘で？

「ええ、石坂さんが今年は、僕のためにわざわざ新しい部屋を一棟建てて下さってね——それも、ゆっくり書き物も出来るようにと気を遣って。……友人の編集者が、〃白川ホテル〃が出来たじやないかなんてひやかすんだが、滞在中は、一枚も書かないで朝から晩まで、ゴルフさ。ハハハ……もつともこの間に、ちょうど〃吉川英治さんを偲ぶ会〃が、講談社の野間さんの別荘でありましてね。亡くなられた、吉川さんの誕生日が十一日なんで、去年からその日を記念して、軽井沢在住の文壇、ジャーナリストが集まることになっているんですよ」

——ことは、どんな方々が集まられたんですか——

「勿論、主賓は吉川未亡人で、文壇関係では、石坂洋次郎夫妻、石川達三夫妻、丹羽文雄夫妻、川端康成、富田常雄、川口松太郎、井上靖、源氏鶏太、佐々木茂索夫妻、井上友一郎、柴田錬三郎、阿川弘之、円地文子、壺井栄、芝木好子、水上勉、生沢朗、それに文芸春秋社の池島信平、講談社の野間夫妻、毎日の本田親男、朝日の扇谷正造、読売の品川主計、角川の角川源義社長等々、生前吉川さんと親しかった実業家達も参加して総勢、六十人ほど集まったかな。広い野間別荘もいっぱいでした。これがまア前夜祭と言うことで、翌日は吉川牌を争うゴルフ大会と言うことです」

——六十人の大コンペですか

「いや、いや、ゴルフをやる者だけ、三十三人ほどです。いま言

った人たちはみんなやりますかね」

——で、ハンディなどは？

「前夜祭の時、川口松太郎氏から発表されました。たとえば丹羽ゴルフ学校の校長がハンディ0、ぼくが20というふうだね。これは有無を言わさぬ強引な決定です。ところが、その時、お慰みの馬券買いもやったんだ。これは吉川さんの誕生日にちなんで十一着の馬は誰になるかと言う遊び。馬券は五百円。ぼくはたまたま隣席に居た井上友一郎君に入れた」

——で、当日の様子を？

「場所は怪井沢の新コース。ぼくの組は画壇の横綱ゴルファー、生沢郎氏に、石坂洋次郎氏、それに凸版印刷の山田社長夫人。インの方から廻った。インの方がずっと難かしいんだが、ぼくのスコアはちょうど五十。この分なら、優勝圏内だよ」と言われてね、それですっかり堅くなつてね、アウトを四十五六で廻るつもりのところ、とうとう五十四もたいてしまった。ハハハ……」

第一位は水上勉、二位は柴田錬三郎、僕は八位。ところが、偶然競馬の方でぼくの買った馬が大穴さ。井上友一郎馬が十一着だった。十一位は井上友一郎と源氏鶏太が同点だったが、ルールによって、年長の井上馬に決定したわけ。しかも、井上馬を買ったのは、ぼくだけだったので、五百円の馬券が、三十三人分のつまり一万六千五百円の賞金になったわけだね。ハハハ……」

——じゃ、旅費をかせいだわけですね——

「そうなんだ。受賞式の時、みんなからひやかされたよ。井上君からは飼馬料を出せと言われるし。……彼は丹羽学校の教頭だ。優勝馬であっても、十一位などとは誰も予想しなかったわけだね」

——その丹羽学校に入学されたでしょうね——

「ええ、特別聴講生と言う恰好だね。丹羽文雄校長、富田常雄、源氏鶏太らとコースを廻わつてね、最初は自己流で調子よく廻わっていたんだ。校長に負けない位とばしていたんだ。が、あれこれアドバイスを受けているうちにだんだん、判らんようになってしまった。……途中で、林の中に球を打ち込むことしばしば。とうとう」



林間学校の生徒だゝなんてひやかされてね。……とにかく、オーソドックスの姿勢に訂正されただけでも大収穫でした。ところで、その翌日だったか、旧コースの方で、折柄、降り出した夕立の中を富田氏らとスタートしていると、神戸の懐かしい顔にばったり出あった。原口市長さんだ」

——ホウそれは珍らしい。——

「まったく思いがけなかった。市長に見物されて、つい固くなつて、あまりいいシヨットが出なかったがね。ハハハ……」

——帰りは、東京で又？

「いや、いや、東京は暑くてとてもゴルフなんぞ。……去年豊岡コースを岩田専太郎さんと廻ってコリゴリしたよ。山賊みたいに真黒に灼けてね。とにかく、夏の東京なんぞ一日も居るところじゃない。それに、阪本前知事じゃないけど、あの人間の洪水、都市の病的な膨張。近代都市として、あそこは全く行詰っていますよ。もう政治的に抜本的なメスをふるはない限りどうにもならない末世末法の感がしますね。学校官庁など移転の容易なものから、富士山麓でも移さなきア。……軽井沢で水上勉から〃白川さんは、神戸に落付いているのが羨ましい〃なんて言われたが田舎文士の哀悲をかこっている僕でも、羨まれることもあるんだねとにかく、われらの神戸の町も、これ以上人口の密集地帯にならんように、中都市政策の経倫を施す必要があるね」

——東京で何か？

「そうそう、某社が築地の料亭〃たむら〃へ招いてくれた晩、編集者から、雑誌、〃神戸っ子〃の話が出て吃驚りました。神戸の冊子が東京まで聞えているとは知らなかったね。……まア、そんなわけで、急いで東京の雑園から脱出して来ましたが、往復の飛行機代もモウケて帰ったわけで、満更〃バカの旅〃でもないでしょう。ハハハ……」

(作家)

確信をもってタジマの目を選んだ
世界の宝石の名品！



9月の宝石 ブルーサファイヤ

宝石輸入商

タジマ

TAJIMA SHOJI CO., LTD

元町2・TEL ③0387・2552

神戸のこと 手当り次第

淀川 長治
え・中 西 勝



市電が湊川公園のトンネルを抜けると、空には秋の名月が輝いてそれが電車のレールに太刀魚のうろこが光っているようなその影を落していたころの、まだネオンも珍らしかったそのころ。湊川の公園近くの松竹劇場では天勝一座がアメリカから持ってきたばかりのジャズの新曲「フウ」や「ヴァレンシア」を、ドラムの中に赤い豆電氣を入れて、陽気に派手に演奏していたのであった。

その湊川公園のトンネルもまだ出来ていなかった大正五、六年ころ「湊川踊り」という、花くま、中^{なか}検、柳原の芸者衆総出の踊りの会が、きょうしん会と呼ばれて湊川の土手の上の公会堂のような建物のなかで催されて、各組の芸者が「みなとがわ踊り」とこんに白地で染め抜いた前かけに赤いたすきで忙しそうに招待客を二階に一階に案内し、私は母に手をつながれて、十二段がえしという春夏秋冬の踊りの、その舞台の背景が、秋の錦、たちまち雪の風景と早変

りの、春日神社の石どをろうが、ボタンと音たて二つに折れるや、それがアッと見るまに松島の雪を背負った老い松に変わるそれが嬉しくて。そして踊りが終るや、見物の招待客のみーんなに福引きがあったそののどかだったあのころ。

中町（なかまち）と本町（ほんまち）に常磐花壇とぎわはなだんという料理屋があって、まだ三つか四つの私は芸者に連れられてよくそのお座敷に行ったものである。「へい、うちのぼんでっせ」。淀丸という芸者がえらい自慢そうに私を抱いて客に見せる。不思議と私はそれをよく覚えてる。当時の芸者も客も、それほど呑気といえは呑気。子供をつれて座敷に出て何とする。その子の中にはさんで夫婦と氣どったかどうか、たいがい私はそのまま何か喰べさされ、ざぶとんと人力車でわが家へ送り戻されたらしいのであった。

抱え主へのサーヴィスか、あるいは単なる見栄か、そんなところから幼稚園のころにかけ、よく芸者に連れられ、聚楽館、松竹劇場（当時は中央劇場と呼んでいたとも記憶する）にいそいそと出かけたものである。私は、そのころ本当に子供なりに、よく売れるねえさんは面白いことをするものと感心したのであった。もちろん自分で花をつけ自まえて行くなどということは、あとで知ったのであるが、私が見とれたのは、かならず、芝居小舎にはいるまえに表の食堂に立ち寄って、私はオムレツ、おねえさんはブドウー酒を小さなコップにぐいと一杯あふってから小舎にはいる。私がいそいそ連れられたのはそのオムレツのためらしいが、芸者のブドウー酒一杯だけを、どうやら「なんで、うちだけ喰べて、あんたは喰べへんのん」と私は子供のくせにこせこせと聞いたらしい。するとその芸者が「これを呑んで、芝居を見にゆきますと、それ、ほうーと顔が赤うなりまっしやろ、すると、えらいきれいに見えまんねん」。私は女の人で、えらい気いを使うねんなあ。僅か五つか六つの私はそれが頭によほどこびりついたか、今もその白いテーブルと小さなブドウー酒のコップが目に見えかぶほど覚えてる。



駒屋の酒まんじゅう、かいやのカヤボコ、青辰のあなごずし……
 といい気で楽しんでた大正七年ごろのその夏に「えらい、こっちゃー」と誰やらがとびこんで来て「おうちと、おむかいの西田はん（西田政治氏宅）」とこが危い……ちゅうことだっせ」と知らせて来た。この年の七月、富山県魚津町から始った米価騰貴の米騒動。^{こめそうどう}「鈴木商店が焼打ちやでえ、ほんまや」。私の家など焼かれたり叩きこわされたりする理由は、あるわけもない。誰かのいやがらせ。それなのに両親はびっくり仰天して、ひとまずから、ただけでもと兵庫の西柳原の踏切りちかくの福海寺に逃げこんで、このお寺のおっさん（僧主）のお座敷を借りて、その蚊帳の中で、母と姉二人と私。親父はわが家に居残ったのであらう。すると夜になって、その福海寺の表をゴォーッという勢いのある大ぜいの足音、バタバタと走るぞうりの音。「焼いてこませ、叩きつぶせ」。私は手ざわり固いもめんぶとんに頭までかくして身をちぢめた。

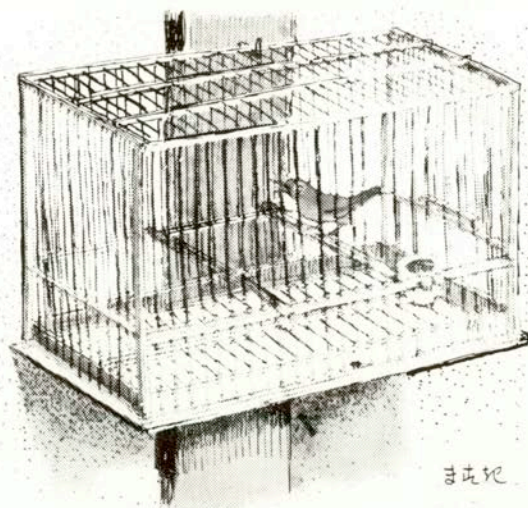
朝になって木魚の音と鐘の音と読経の声で「ここは、いったい、どこ」私はやっとお寺だと思いだし、朝のおつとめのすんだ若い坊さんのバタバタと廊下を小走りに走るのを障子も閉めていないその廊下を蚊帳の中から眺めながら、その若い坊さんが「おまえ、えらい蚊帳のなか見とったやないか」「あほ、お前やないか、あのとうさんのケツ見とったぞ」。私はあわてて二人の姉を見た。上の姉がおしり丸だしのその恰好。えらいこっちゃ、私はとび上ってその姉に夏ぶとんをひっかけた。私の十二、三のところだったろう。

それより二年くらいまえ、と云うと私の十うくらいのころは大正琴というのが流行し、それで何を弾いていたかというところ「愛のバラの花」。そしてそれはまさに米国南北戦争の北軍の軍歌のメロデーだったのである。湊川公園のトンネルのできる前のその土手にかかったサーカスのじんたもそのメロデー。活動写真館は連続大活劇時代。銀座の看板の上にはサーカスの玉乗り男がくるくる廻る玉の上であぶなつかし両足両手を動かしているイルミネーションがてんめつしていた。

（映画評論家）

うぐいす

阪 本 勝
え・小 松 益 喜



八月十二日の早朝、ことし十八になるわが家のお手伝いさん、松ちゃんがお盆で田舎に帰った。四国の観音寺から小さな汽船で一時間半ばかりの伊吹島が故郷である。

何事にもよく気のつくむすめで、田舎へと心のはずむ出発のまぎわにも、わたしの愛鳥うぐいすの籠の掃除をし、すり餌もやり、水浴びもさせて発っていった。

うちのうぐいすは、一日に一回餌をやり二回水浴びをさせるならわしだから、その日は昼過ぎ山妻が如露で水浴びをさせてやった。

ところがその翌朝である。山妻が勝手もとで、しきりに何かかちやかちやいわせて物探しをしている様子なので、朝早くから何をバ

タバタしてるんだときくと、うぐいすの餌を入れた缶が見つからない、という。そして「松ちゃんどこへおいていったんやろ」などとほやいている。わたしもいっしょにあちこち探してみたが、なるほどどこにも見つからない。これは困ったとわたしは思った。そしてあわてた。というのは、つぎのような経験がわたしにあるからである。

戦前東京牛込に住んでいたころ、わたしは一羽のうぐいすを飼っていた。早春から晩春にかけては、ひねもすソプラノで啼きくらし近所の人々からお礼をいわれたほどの名鳥だった。ところがうぐいすという小鳥は夏に入るとぼったり啼かなくなる。そればかりでなく、よほど手入れをよくしても、素人は夏を越すまでに死なしてしまうことが多い。なかなかむつかしい鳥なのだ。

ある早朝のこと、わたしはすり餌をつくろうと餌の缶を開けてみると、粉末がほとんど残っていないのに気がついた。まあいいだろう、そのうち近所の小鳥屋も起きるだろうからそれからでもいいと考え、朝食をしたため新聞を読みなどして、さて小鳥屋に餌を買いにゆこうと、なにげなく廊下の柱にかけてあった籠をのぞいてみると、さきほどまで籠のなかでげんきよく動いていた愛鳥が眼をつぶって横たわっている。驚いて籠から取り出し頬にあててみたが、もうおそかった。あわれにはかない死だった。

そのときの経験が身にしみているから、餌の缶を探しあぐんでわたしはあわてたのである。朝の六時ごろだったから、商店街の小鳥屋はまだ店を開けていないだろう。しかし店の開くまで待っていると、東京の二の舞いとなるおそれがある。しかも昨朝松ちゃんは、へいぜいより早く五時ごろに餌をやったはずだから、うぐいすのおなかはぎりぎりに足りない。こりや危い。

わたしはそこで、山妻とむすめに、町に降りて行って、小鳥屋の店を開けてもらって、餌を買ってきてくれと頼んだ。しかし二人ともころよくひきうけてくれなかった。そこでわたしはただちに散歩着に着かえて家を出た。バスはまだ動いてない。国鉄芦屋駅そばの小鳥屋まで約二十分の道をわたしはいそぎ足で降りていった。わ

がいとしのうぐいすを死なしてはならないと、まるで十字軍の騎士のような気持だった。

商店街はまだ眠っていた。小鳥屋の店も閉っていた。トントンと表戸をたたくと、店のなかの犬がないて、戸の裏側をがりがり爪で搔く音がきこえた。やがてねむそうな目をしておかみさんが戸を開けてくれた。わたしは朝あけに眠りをさました失礼をわび、訳を話した。ふきげんそうだったおかみさんの顔にほほえみが現われはじめた。

わたしは東京での経験を話した。そしてうちのうぐいすは一日一回餌をやるだけだとも説明した。かの女は笑いながらこころよく紙袋に粉末をつめてくれた。そしていった。「おうちのうぐいす仕合せやわ」

わたしはその袋を小脇にかかえて、もと来た道を上っていった。芦屋の山は朝日に輝やき、空は晴れわたっていた。

玄関に飛びこむと、わが愛鳥は元氣よく籠のなかで宙返りをしていった。やれやれと胸を撫でおろした。わたしはさっそく買って来た粉末と菜の葉を磨鉢ですり、緑鮮やかなすり餌をつくった。山妻は籠の床を掃除した。わたしは小さな如露で冷たい水を羽根にかけてやった。小鳥はうれしそうに水浴びした。新鮮な餌のいっぱいはいった容器を入れてやると、先きのとがった目をきらきら光らして、むさぼるようにたべはじめた。

わたしがこんなにあわてずとも、うぐいすは死ななかったかもしれない。しかしそうでなかったかもしれない。それはともかくとして、わたしがいちばんうれしく思ったのは、松ちゃんの留守中に、かの女にとっても愛鳥にちがいないこの小鳥の命を守り得たことである。さびしい身の上のこのむすめが十七日に帰ってきて、もし玄関に鳥籠がなかったとしたら、どんな思いをすることだらう。それにつけても、暁の五時半出発のまぎわに、いとしうぐいすの籠を掃除し、水浴びをさせ、すり餌をやることを忘れなかった鳥のむすめの純情にわたしはうたれる。――八月十四日――

（随筆家）



北村パール

世界の人々に
愛される
キタムラパール



北村真珠株式会社

神戸 / 元町2・東京 / スキヤ橋センター
TEL. ③ 0072 (571) 8032

第三の美容



EYEGLASSES CRATE THE THIRD BEAUTY

ハイファッション のめがね

神戸眼鏡院

元町3・電③3112-3・③1443
③ 0551 (貿易部)

〈神戸クーポン歓迎〉

お慶びの日

しあわせな愛の日に、ウェディングケーキは美しい想い出を創ります。

風月堂がまごころこめて作る優雅で清らかなお菓子はいつまでも喜んでいただけることでしょう。

晴れのご婚儀に、伝統と、新しい味覚を加えた風月堂のお菓子をお選びください。

ウェディングケーキ・デコレーションケーキ・松竹梅引菓子・紅白饅頭



風月堂

神戸元町三丁目 TEL ③ 695・696



神戸百店会

R. NAGATA

歐風家具・室内装飾・数物

株式会社 永田良介商店

神戸 三宮 大丸前 電話 ③ 1290 5520